

遊びのリスクに対する幼稚園保護者の認識の変容要因

松本 信吾 杉村伸一郎 中坪 史典 清水 寿代
金岡 美幸 久原 有貴 堀 奈美
(研究協力者) 上山瑠津子

1. 問題と目的

欧米では、1980年代後半から2000年頃にかけて、遊具の安全基準が導入された。それに伴い、遊び場における事故防止と称した過度な「ハザード」対策によって、子どもがチャレンジするべき、「遊びの価値」としての「リスク」までも取り除いてしまった苦い経験を持つ。その経験から現在は、遊びで「リスク」にチャレンジして、怪我をすることがあっても、それは大きな事故や新たな危険を避けるための学習機会であり、それによって自らの身の安全に対する判断力、行動力としての「安全力」が身につくという考え方が主流になっている(大坪・仙田¹⁾, 2005)。一方、日本においては、遊具による死亡事故などを受け、2002年に国土交通省²⁾より「都市公園における遊具の安全確保に関する指針」が出され、続いて多くの遊具メーカーが会員として加入している社団法人日本公園施設業協会が「遊具の安全に関する基準」を作成し、2003年4月より、公園はもとより幼稚園・保育園の園庭遊具に対しても基準適用が要請されることになった。その結果、ハザードに対する認識が高まったが、同時に子どもの怪我などに対する管理者責任や遊具等の製造物責任が問われるようになり、子どもの遊び環境が過度に制約される現実があることが指摘されている(港区児童遊園等あり方検討委員会³⁾, 2010)。

遊びのリスクについて保護者の認識を調査した先行研究に、松田他⁴⁾(2009)がある。松田他は日常の子どもの遊びの安全性にをどのように捉えているかについて、質問項目を用いて保護者と大学生を比較した。その結果、保護者は大学生よりも、子どもの遊びに対して安全性よりもリスクを通した経験や子どもの自主性を重んじる傾向があることを指摘し、その理由として、日常から子どもに接しているために子どもの様々な行動を経験していることをあげている。すなわち、

子どもの様々な行動に触れる経験することによりリスクに対する認識が変容する可能性を指摘している。

また、大坪他⁵⁾(2011)は、子どもがリスクにチャレンジすることによって怪我をすることを保護者が積極的に受容する「受容派」とそれとを比較すると、「受容派」の子どもの方が子どものリスクに対するチャレンジを行い、それを達成する割合が高いことを明らかにした。すなわち、保護者の「リスク」を受容する態度により、子どもがリスクに挑戦しそれを達成する割合も高まり、ひいては危険回避能力も高まるとしている。そして今後の課題として、「リスク」の効用を、いかにして保護者等に啓発するかという点を指摘している。保護者への啓発は喫緊の問題で、実際に、筆者の身の回りの保育者は、集団保育施設で怪我をさせることで保護者からの苦情がくるために、とにかく怪我をさせないよう過度に安全を求める保育を行わざるを得ないという苦しい現状を語っている。

筆頭筆者が勤務する幼稚園は、「森の幼稚園」として、自然の中で幼児が伸びやかに過ごすことを大事にする保育を行っている。禁止をなるべくなくし、幼児の挑戦する姿勢を大事にする教育方針であるため、子どもはリスクを含んだ活動を行うことが多い。そのような保育を実践するためには、保護者の理解が必要であるために、園から保護者に向けた手紙等でリスクの意味や効用を発信している。

そこで本研究では、当該園の保護者に対し、子どもの遊びのリスクに対する認識が幼稚園に入園することによって変化したかどうかを調査することとした。幼稚園入園前と現在のそれぞれの心境について質問紙調査を行うことで、子どもの遊びのリスクに対する認識についてどのような因子内容が存在するのか、それぞれの因子内容に対して入園前と現在でその認識が変容するか、変容したのであればその要因は何であるか、以上

のことを明らかにすることを目的とする。

2. 方法

調査対象

筆頭筆者が勤務する幼稚園に在園する保護者154名(男性77名, 女性77名)を対象に質問紙調査を行った。有効回答率は74.7%であった(男性54名, 女性59名, 最も多かった年齢区分は35-39歳で全体の45%)。調査期間は2014年11月~12月であった。

質問項目

質問紙調査の冒頭において, 調査対象者の基本属性として, 性別, 年齢, 子どもの所属クラス, 当該園に子どもを通わせた通園年数を質問した。その後, 子どもの遊びの安全性に対する気持ちを尋ねた質問に対し

て, 「1. そうは思わない」から「5. そう思う」の5件法で, 現在の気持ちに近い番号と入園する前の気持ちに近い番号, それぞれを回答してもらった。質問項目は, 松田他⁴⁾が作成した, 「日常の子どもの遊びの安全性についてどのように捉えているかについての質問」をベースにして, 当該園の実情に合わせて追加及び文言の変更を加えた32項目であった。最後に, 「子どもの遊びとスリルやリスクのことについて, あなた自身の考え方に影響を与えたものがあれば, 以下の中から3つまで番号を記入してください」という質問を行い, 11項目から, 影響を与えたものを上位3つまで選んでもらった。各項目内容の詳細については, 以下の結果と考察において述べる。

Table 1 各質問項目の入園前および現在の平均値の比較

	入園前		現在		現在- 入園前	t	df=112
	平均値	SD	平均値	SD			
1 スリルある遊びも, ある程度経験させた方が良く 思う	4.12	0.90	4.65	0.55	0.52	8.29	***
2 年齢にあった遊び方を する方が良く思う	3.75	1.02	3.47	1.20	-0.28	-3.05	**
3 日頃から, 子どもが危 ない遊び方をしないか と不安になることが多 い	3.21	1.21	2.66	1.11	-0.55	-5.54	***
4 けがをしそうだと感じ ても, 遊び方は大人が制 限せず, 原則は子ども の主体性に任せている	2.58	0.99	3.38	0.96	0.81	8.57	***
5 子どもが遊び方で戸 惑っていたら, すぐに手 伝う	2.99	1.16	2.27	0.94	-0.73	-7.77	***
6 おもちゃや遊具は子 どもの発想で色々な遊 び方をしていると思う	4.28	0.89	4.73	0.57	0.45	6.91	***
7 遊具は少々スリルがあ った方が良く思う	3.41	0.98	3.91	0.87	0.50	7.08	***
8 けがをしない遊び方の 工夫は子ども自身にさ せたい	3.30	1.16	4.12	1.00	0.81	8.85	***
9 リスクのある遊びを通 して, けがをしない遊 び方を身につけていく と思う	3.56	1.04	4.33	0.74	0.77	8.58	***
10 安全のため, 子どもの 遊びはできるだけ大人 が見ておくべきだと思 う	4.18	0.86	3.78	0.91	-0.40	-5.83	***
11 少しでもけがをしそ うな遊びはさせたくな い	2.55	1.20	1.92	0.93	-0.63	-6.85	***
12 普段の子どもの遊 びで, 危ないと感じる ことは少ない	3.19	1.11	3.41	1.19	0.22	2.42	*
13 子どもが遊び方で 危なそうな行動をした ら, すぐに止めに入る	3.95	0.99	3.30	1.02	-0.65	-8.46	***
14 子どもが遊ぶときは , 子どもの興味を第一 に考える	4.21	0.87	4.43	0.73	0.22	3.78	***
15 おもちゃや遊具は決 められた使い方以外 の遊びをさせたくな い	1.93	1.02	1.72	0.86	-0.21	-4.17	***
16 安全な遊び方につ いて, 子どもと話すこ とはない	2.24	1.16	2.16	1.13	-0.08	-1.22	
17 けがをしないかどう かは, 子ども自身に判 断させたい	2.72	1.05	3.38	1.10	0.66	7.65	***
18 子どもが遊び方で 戸惑っていても, すぐ には手伝わせず, ま ずは見守る	3.54	1.04	4.27	0.76	0.73	8.31	***
19 年齢よりも少し高 いレベルの遊び方を する方が良く思う	3.22	1.00	3.36	0.95	0.14	2.06	*
20 日頃, 子どもが危 ない遊び方をしないか と不安になる事は少 ない	3.14	1.21	3.56	1.23	0.42	4.35	***
21 スリルのある遊 びはけがにつながる のでさせたくない	2.42	1.08	1.89	0.89	-0.53	-6.44	***
22 遊びの中でけがを したら, その責任は子 ども自身にもあると思 う	3.23	1.13	3.64	1.12	0.41	5.02	***
23 けがをしそうだと 感じると, 子どもに遊 び方を制限することが ある	4.03	0.96	3.53	0.95	-0.50	-6.07	***
24 遊具は, 安全であ ればスリルがなくても 良く思う	2.72	1.12	2.35	1.08	-0.36	-5.45	***
25 子どもがけがを することは, 親にと って負担になる危険 がない限り, 大人は子 どもの遊びを監視し ない方が良く思う	3.32	1.14	3.03	1.21	-0.29	-4.77	***
26 普段の子どもの 遊びで, 危ないと感じ ることが多い	2.92	1.17	3.29	1.23	0.37	5.29	***
27 遊びの中で時 には少々のけがはや むを得ないと思う	2.49	0.93	2.18	0.94	-0.31	-4.10	***
28 子どもが遊 び方で危なそうな行 動をしても, 自分で 解決するようすぐ止 め見守る	4.27	0.78	4.58	0.56	0.32	4.85	***
29 安全な遊び方 について, 日頃から 子どもと話している	2.91	1.14	3.53	1.09	0.62	7.76	***
30 子どもが遊ぶ ときは, 安全を第一 に考える	3.18	1.14	3.26	1.19	0.08	1.22	
31 子どもが遊ぶ 遊具やおもちゃのけ がの危険性は, 徹底 して取り除くべき である	3.50	1.13	3.25	1.06	-0.25	-3.98	***
32	2.59	1.10	2.22	0.98	-0.37	-5.38	***

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .0001$

3. 結 果

各項目における入園前と現在の得点の比較

「日常の子どもの遊びの安全性についてどのように捉えているかについての質問」について、入園前と現在の認識の差を検討するため、各項目の平均値と標準偏差を算出し、*t*検定を行った (Table 1)。*t*検定を繰り返し行うため、有意確率を補正するBonferroni補正法に従い、検定全体の有意水準を検定数で割った値を有意水準とした。*p* 値が.05の場合は、32項目の検定を行うので .05/32=.001563 が有意水準となる。

各項目の入園前と現在の認識において、32項目中27項目で有意差が見られた。特に変化が大きかった項目は、8「けがをしない遊び方の工夫は子ども自身にさ

せたい」、4「けがをしそうだと感じて、遊び方は大人が制限せず、原則は子どもの主体性に任せている」、9「リスクのある遊びを通して、けがをしない遊び方を身につけていくと思う」、18「子どもが遊び方で戸惑っていても、すぐには手伝わず、まずは見守る」、5「子どもが遊び方で戸惑っていたら、すぐに手伝う」であり、一方有意差が見られなかった項目は、16「安全な遊び方について、子どもと話すことはない」、30「安全な遊び方について、日頃から子どもと話している」、19「年齢よりも少し高いレベルの遊び方をする方が良いと思う」、12「普段の子どもの遊びで、危ないと感じることは少ない」、2「年齢にあった遊び方をする方が良いと思う」の5項目であった。

Table 2 因子分析の結果 (一般化された最小2乗プロマックス回転)

	因子負荷量			
	I	II	III	IV
危険回避				
21 スリルのある遊びはけがにつながるのでさせたくない	.960	.160	-.001	.065
11 少しでもけがをしそうな遊びはさせたくない	.686	.032	-.034	.106
7 遊具は少々スリルがあった方が良く思う	-.660	.101	-.039	.152
24 遊具は、安全であればスリルがなくても良く思う	.653	.199	.053	.129
32 子どもが遊ぶ遊具やおもちゃのけがの危険性は、徹底して取り除くべきである	.567	.038	.093	-.077
28 28遊びの中で時には少々のけがはやむを得ないと思う	-.430	.291	.074	.291
1 スリルある遊びも、ある程度経験させた方が良く思う	-.377	.325	.160	.155
子どもによるリスク管理				
17 けがをしないかどうかは、子ども自身に判断させたい	.247	.826	.067	-.154
8 けがをしない遊び方の工夫は子ども自身にさせたい	.082	.620	-.099	.219
9 リスクのある遊びを通して、けがをしない遊び方を身につけていくと思う	-.093	.614	-.115	.033
4 けがをしそうだと感じて、遊び方は大人が制限せず、原則は子どもの主体性に任せている	-.101	.596	-.050	-.184
29 子どもが遊び方で危なそうな行動をしても、自分で解決するようすぐ止めず見守る	-.039	.580	.003	-.083
22 遊びの中でけがをしたら、その責任は子ども自身にもあると思う	.232	.493	.035	-.098
23 けがをしそうだと感じると、子どもに遊び方を制限することがある	.168	-.411	.103	.182
13 子どもが遊び方で危なそうな行動をしたら、すぐに止めに入る	.137	-.400	.098	.361
18 子どもが遊び方で戸惑っていても、すぐには手伝わず、まずは見守る	-.025	.397	.166	.365
危険に対する不安				
27 普段の子どもの遊びで、危ないと感じることが多い	-.028	.078	-.882	-.108
12 普段の子どもの遊びで、危ないと感じることは少ない	.103	-.050	.798	.012
20 日頃、子どもが危ない遊び方をしないかと不安になる事は少ない	.044	.042	.764	-.312
3 日頃から、子どもが危ない遊び方をしないかと不安になることが多い	.172	.034	-.474	.446
14 子どもが遊ぶときは、子どもの興味を第一に考える	-.118	.093	.427	.351
遊びの安全管理				
30 安全な遊び方について、日頃から子どもと話している	-.038	-.008	-.069	.638
31 子どもが遊ぶときは、安全を第一に考える	.248	-.126	.060	.611
16 安全な遊び方について、子どもと話すことはない	.110	.093	.064	-.497
	因子間相関			
	I	—	-.493	-.200
	II		—	.285
	III			—
	IV			—

因子分析

質問の32項目に対して一般化された最小2乗法による因子分析を行った。固有値の変化は、6.11, 2.74, 2.58, 2.12, 1.77, 1.50…というものであり、4因子構造が妥当であると考えられた。そこで再度4因子を仮定して一般化された最小2乗法・Promax回転による因子分析を行った。項目抽出の条件を、固有値1以上、因子負荷量.30以上にした結果、8項目が分析から除外された。再度一般化された最小2乗法・Promax回転による因子分析を行った結果、4因子の累積寄与率は、51.6%であった。最終的な因子パターンと因子間相関をTable 2に示す。

第1因子は、7項目から構成され、「スリルのある遊びはけがにつながるのでさせたくない」「遊具は、安全であればスリルがなくても良いと思う」など、危険を避ける内容の項目が高い負荷量を示していた。そこで、「危険回避」と命名した。

第2因子は、9項目から構成され、「けがをしないかどうかは、子ども自身に判断させたい」「リスクのある遊びを通して、けがをしない遊び方を身につけていくと思う」など、子ども自身によるリスク管理を重視する内容の項目が高い負荷量を示していた。そこで、「子どもによるリスク管理」と命名した。

第3因子は、5項目から構成され、「普段の子どもの遊びで、危ないと感じることが多い」「日頃から、子どもが危ない遊び方をしないかと不安になることが多い」など、危険に対して不安を感じる内容の項目が高い負荷量を示していた。そこで、「危険に対する不安」と命名した。

第4因子は、3項目から構成され、「安全な遊び方について、日頃から子どもと話している」「子どもが遊ぶときは、安全を第一に考える」など、遊び全般への注意についての内容の項目が高い負荷量を示していた。そこで、「遊びの安全管理」と命名した。

次に、内的整合性を検討するために各下位尺度の α 係数を算出した。このとき、項目22及び14を削除することで α 係数が高くなったので、各下位尺度から削除した結果、第1, 2, 3因子は、それぞれ.79, .77, .81とある程度信頼できる値となった。第4因子に関しては、31項目を削除した方が α 係数は高まるが、第4因子の項目数が極めて少ないために下位尺度の含めた結果、.68となった。下位尺度間相関をTable 3に示す。

下位尺度における入園前と現在の得点の比較

入園前と現在におけるリスク認識の差の検討を行うために、下位尺度得点について t 検定を行った (Table 4参照)。その結果、「危険回避」($t(112) = -10.01$,

Table 3 下位尺度間相関と α 係数

	1	2	3	4	α
1 危険回避	-	-0.46**	0.18	0.21 *	.79
2 子どもによるリスク管理		-	-0.22 *	-0.19 *	.77
3 危険に対する不安			-	0.31 **	.81
4 遊びの安全管理				-	.68

$p < .001$) と「危険に対する不安」($t(112) = -5.56$, $p < .001$) は、入園前より現在の方が有意に低い得点を示していた。「子どもによるリスク管理」($t(112) = 11.9$, $p < .001$) は、入園前より現在の方が有意に高い得点を示していた。つまり、幼稚園に入園したことにより、保護者は危険に対する不安が低下し、危険を回避させようとする傾向が低くなること、そして子ども自身にリスク管理をさせようとする傾向が強くなること示された。「遊びの安全管理」については、入園前と現在の得点差は有意ではなかった ($t(112) = -.69$, $n.s.$)。

Table 4 時点別の下位尺度得点の平均値とSD

	入園前		現在	
	平均値	SD	平均値	SD
危険回避	16.49	4.79	13.25	4.00
子どもによるリスク管理	22.60	5.39	28.20	4.76
危険に対する不安	11.37	3.35	9.88	3.60
遊びの安全管理	10.43	2.56	10.35	2.64

保護者と子どもの性別による下位尺度得点の違い

子どもの遊びにおけるリスク認識は、保護者の性別や子どもの性別によって異なる可能性がある。そこで、保護者と子どもの性別を組み合わせ (父親・男児群29名, 父親・女児群25名, 母親・男児群28名, 母親・女児群31名), 入園前と現在の下位尺度得点の平均値と

Table 5 入園前の保護者性別および子ども性別の下位尺度得点の平均値とSD

保護者性別 子ども性別	父親		母親	
	男児	女児	男児	女児
危険回避	15.21 (4.56)	16.40 (5.88)	16.14 (4.47)	18.06 (4.01)
子どもによるリスク管理	24.14 (6.47)	23.52 (5.38)	22.93 (4.95)	20.23 (3.89)
危険に対する不安	12.34 (3.29)	9.84 (2.93)	11.50 (3.63)	11.58 (3.16)
遊びの安全管理	9.83 (2.87)	10.16 (2.99)	10.71 (2.27)	10.97 (2.02)

Table 6 現在の保護者性別と子ども性別の下位尺度得点の平均値とSD

保護者性別 子ども性別	父親		母親	
	男児	女児	男児	女児
危険回避	12.62 (3.29)	13.12 (4.59)	13.14 (3.94)	14.03 (4.20)
子どもによるリスク管理	28.90 (4.50)	27.44 (5.47)	29.11 (4.26)	27.23 (4.77)
危険に対する不安	10.83 (3.30)	8.88 (3.23)	10.46 (4.25)	9.26 (3.33)
遊びの安全管理	10.10 (2.73)	10.12 (3.00)	10.57 (2.71)	10.55 (2.23)

標準偏差を算出した (Table 5, Table 6参照)。そして、保護者の性別 (父親・母親) と子どもの性別 (男児・女児) を独立変数、下位尺度である「危険回避」「子どもによるリスク管理」「危険に対する不安」「遊びの安全管理」を従属変数として2要因分散分析を行った。

その結果、入園前では、「危険回避」において子どもの性別の主効果が有意傾向で ($F(1,109) = 3.04, p < .10$)。女児の方が男児より得点が高かった。また、「子どもによるリスク管理」と「遊びの安全管理」において保護者の性別の主効果が有意もしくは傾向であり ($F(1,109) = 5.19, p < .05, F(1,109) = 3.09, p < .10$)、「子どもによるリスク管理」では、父親の方が母親より得点が高く、「遊びの安全管理」では、母親の方が父親より得点が高かった。また、「子どもによるリスク管理」では、子どもの性別の主効果が有意傾向であった ($F(1,109) = 2.82, p < .10$)。さらに、「危険に対する不安」において、保護者の性別と子どもの性別の交互作用が有意であり ($F(1,109) = 4.38, p < .05$)、父親では男児の方が女児より「危険に対する不安」が高かったが、母親では、男児と女児が同程度であった。

一方、現在では「子どもによるリスク管理」において、子どもの性別の主効果が有意傾向 ($F(1,109) = 3.46, p < .10$)、「危険に対する不安」において、子どもの性別の主効果が有意であった ($F(1,109) = 5.51, p < .05$)。ともに、男児の方が女児より得点が高かった。

入園前と現在の結果を比較すると、「危険回避」の項目において、入園前には女児の方が高い傾向があったが、現在では見られなくなっている。つまり、入園したことにより、女児だから危険にさらしたくないという傾向が見られなくなっている。また、入園前は父親の方が母親より「子どもによるリスク管理」が高く「遊びの安全管理」が低い、つまり母親の方が管理する傾向が強かったものが入園によりその差異が見られなくなっている。

通園年数による下位尺度得点の違い

時点 (入園前 - 入園後 (現在)) と通園年数 (1年目, 2年目, 3年目, 4年以上) を独立変数に、子どもの遊びにおけるリスク認識尺度の下位尺度である「危険回避」「子どもによるリスク管理」「危険に対する不安」「遊びの安全管理」を従属変数として2要因分散分析を行った (Table 7参照)。

その結果、「危険回避」では、時点の主効果が有意で、さらに有意な交互作用も見られた (それぞれ, $F(1,109) = 104.35, p < .01, F(3,109) = 3.03, p < .05$)。交互作用が有意であったことから、単純主効果の検定を行った。その結果、通園年数 (1年目, 2年目, 3年目, 4年

以上) の各水準における時点の単純主効果が (それぞれ, $F(1,109) = 20.96, p < .01, F(1,109) = 58.03, p < .01, F(1,109) = 18.62, p < .01, F(1,109) = 17.17, p < .01$) 有意であった。

「子どもによるリスク管理」では、時点の主効果が有意で ($F(1,109) = 161.7, p < .01$)、通園年数の主効果は有意傾向であった ($F(3,109) = 2.55, p < .10$)。さらに有意な交互作用も見られた ($F(3,109) = 6.40, p < .01$)。交互作用が有意であったことから、単純主効果の検定を行った。その結果、通園年数 (1年目, 2年目, 3年目, 4年以上) の各水準における時点の単純主効果は全て有意であった (順に, $F(1,109) = 16.29, p < .001, F(1,109) = 86.05, p < .001, F(1,109) = 25.10, p < .001, F(1,109) = 53.92, p < .001$)。

「危険に対する不安」では、時点の主効果が有意であり ($F(1,109) = 31.40, p < .001$)、時点と通園年数の交互作用は有意傾向であった ($F(1,109) = 2.19, p < .10$)。「遊びの安全管理」では、通園年数の主効果が有意であった ($F(1,109) = 4.66, p < .05$)。

主効果が見られた箇所では、いずれの通園年数においても、入園により危険回避をしなくなる傾向、子どもによるリスク管理をさせる傾向、危険に対する不安が低下する傾向が見られた。

交互作用が見られた箇所では、通園1年目に比べて通園2年目の方が、入園前に比べ現在の得点が、「危険回避」においてより低下し、「子どもによるリスク

Table7 通園年数および時点別の「危険回避」得点の平均値とSD

	入園前		現在	
	平均値	SD	平均値	SD
危険回避				
通園年数1年	16.75	4.54	14.19	4.25
通園年数2年	16.71	5.48	11.89	3.75
通園年数3年	16.53	5.51	13.21	4.76
通園年数4年以上	15.93	4.05	13.40	3.16
子どもによるリスク管理				
通園年数1年	22.78	4.85	25.89	4.16
通園年数2年	23.21	6.15	31.32	4.26
通園年数3年	22.74	5.06	28.05	3.50
通園年数4年以上	21.83	5.63	28.03	5.12
危険に対する不安				
通園年数1年	11.72	3.47	11.00	3.63
通園年数2年	11.32	2.83	8.82	3.07
通園年数3年	10.37	2.52	9.16	3.50
通園年数4年以上	11.63	4.06	9.97	3.85
遊びの安全管理				
通園年数1年	11.28	2.26	11.50	2.20
通園年数2年	10.61	2.44	10.54	2.20
通園年数3年	10.16	2.43	10.00	2.81
通園年数4年以上	9.43	2.81	9.00	2.83

管理」においてより向上していること、すなわち危険回避をしなくなり、子どもにリスク管理をさせる傾向が示された。通園1年目の保護者とは、調査時点では実際にはまだ子どもを幼稚園に1年間も通わせておらず、通園2年目とは倍以上の通園年数の違いがある。幼稚園生活を経験することで、危険回避や保護者によるリスク管理に関して、考え方がより変容していることが示唆された。

リスクに対する認識変容の要因

保護者のリスクに対する認識が、「危険回避」「危険に対する不安」において低下し、逆に、「子どもによるリスク管理」において向上していることが示された。その要因を探るため、「子どもの遊びとスリルやリスクのことについて、あなた自身の考え方に影響を与えたものがあれば、以下の中から3つまで番号を記入してください」という質問を行い、11項目の中から上位3つまで選んでもらい、集計したものがTable 8である。

Table 8 リスクに対する認識変容の要因

	度数	パーセント
子どもの普段の様子や活動	90	27.9
参観日での子どもの様子	74	22.9
担任との話	29	9.0
FC作業や木いちご一役の森での労働	28	8.7
森の達人の講演	21	6.5
クラスだより	18	5.6
ブログ	18	5.6
その他	14	4.3
森の達人コラム	11	3.4
園だより	10	3.1
森の達人と森を歩く機会	10	3.1
合計	323	100.0

その結果、最も回答が多かったものが、「子どもの普段の様子や活動」で有効回答数の27.9%、次いで「参観日での子どもの様子」の22.9%で、この両者で全体の半数を占めた。自由記述の中には、参観日での子どもの姿や普段遊んでいる子どもの姿から、子ども自身がリスクを管理していることを感じたという内容のものが多く、子どもの現実の姿が、保護者のリスクに対する認識の変容に最も影響を与えていることが示唆された。これは、松田他⁴⁾で示された、保護者が子どもの遊びに対して安全性よりもリスクを通じた経験や子どもの自主性を重んじる理由として、日常から子どもに接しているために子どもの様々な行動を経験してい

る、としていることを支持するものであった。

3番目に多かったのは、「担任との話」であった。自由記述に、「我が子の姿を通して話をしてもらうことで、リスクに挑戦する意味がわかった」とあったように、直接我が子の姿を通して話をされることで、保護者はリスクに対する認識を変容させる可能性が示唆された。次に多かったのは「FC作業や木いちご一役の森での労働」であった。FC作業というのは、幼稚園の父親の会の環境整備作業のこと、木いちご一役というのは母親の会のボランティア作業のことで、これは、具体的に森に入って、間伐などの森の環境を整備したり、薪になる木を集めたりする作業である。この項目を選んだ28人のうち26人は父親であり、特に父親にとって影響が大きかったことがうかがえる。自由記述欄には「実際にこの場所を使って遊んでいるのかということが自分自身の身体を通して感じられた」とあり、直接フィールドを体験したことが変容の要因になっていることが記されていた。

一方で「園だより」や「クラスだより」「森の達人(当該園の非常勤講師で、子どもと自然とをつなぐインタープリター)コラム」という紙媒体での伝達は、比較的影響を与えていないことが示された。それよりも、年に1度しかない「森の達人の講演」の回答が多かった。

4. 考 察

本研究では、子どもの遊びのリスクについてどのような因子内容が存在するのか、それぞれの因子内容に対して入園前と現在で保護者の認識が変容するか、変容したのであればその要因は何であるかを明らかにすることを目的とし、当該園の保護者にアンケート調査を行った。

保護者が認識するリスクの内容

保護者が考えるリスクに対する認識は、「危険回避」「子どもによるリスク管理」「危険に対する不安」「遊びの安全管理」の各因子に分けられることが示された。松田他⁴⁾は、同様の質問紙調査による因子分析により4因子を得て、「子どもの安全な遊びのための大人の介入」「スリルある遊びに対する許容」「安全のための遊びの制限」「危険な遊びに対する不安」と命名している。本研究における「危険回避」は松田他⁴⁾の「スリルある遊びに対する許容」とほぼ同内容、「危険に対する不安」は「危険な遊びに対する不安」とほぼ同内容になっている。一方、松田他⁴⁾の「子どもの安全な遊びのための大人の介入」「安全のための遊びの制限」の内容が、本研究では「子どもによるリスク管

理」にまとめられている。これは、松田他⁴⁾における調査対象は学生も含んでおり、調査対象者はあくまで大人が管理する主体と考えられる傾向が強いものに対して、本研究における調査対象者はリスクのある遊びをよく行う幼稚園の保護者であり、ある程度子どもにリスクを管理させようとする考えが反映されている可能性がある。

ここでは、保護者が認識するリスクの内容は、ある程度共通する因子内容があること、及びリスク管理の主体を大人におくか子どもにおくかによって、その因子内容が変化する可能性が示唆された。

入園前と現在のリスクに対する認識の変化

幼稚園入園前と調査時点（現在）では「危険回避」と「危険に対する不安」に関しては得点が低下する方向に、「子どもによるリスク管理」に関しては得点が向上する方向に、変容していることが示された。このことは、幼稚園に子どもが入園したことによる経験が、保護者がよりリスクを受容するようになり、より子ども自身にリスクを管理させ、保護者による管理が低くなることを示している。これは、大坪他⁵⁾が課題として示していた「リスク」の効用を、幼稚園入園により、保護者に啓発することができたことを示すものである。

また、「危険に対する不安」では、入園前は父親において、現在は父親と母親ともに男児の方が女児より得点が高い、つまり危険に対する不安が強いことが示された。入園前の父親が男児に対してより危険に対する不安が大きいのは、自分の経験からも男児の方が無鉄砲で危なっかしいという認識が働いていた可能性が考えられる。一方、現在の時点では先にも述べたように入園前に比べると危険に対する不安は低くなっているが、男児と女児を比較すると男児の方が高い傾向が見られた。この理由は、実際に幼稚園の森の遊び場環境を見ることで、ターザンブランコや綱渡りなどのリスクを伴う遊具が多いことから、男児の親の方がよりその危険に直面するリスクを考え、不安を強く感じる傾向があるとも考えられる。

また、「危険回避」の項目において、入園前には女児が有意に高かったものが、現在では見られなくなっている。つまり、入園したことにより、女児だから危険にさらしたくないという傾向が見られなくなっている。これは、入園後に実際に子どもの遊ぶ姿を見るなどして、多少リスクのある遊びでも行ってほしいというように、保護者の女児のリスクに対する認識が変容したことを示すものであろう。

さらに、入園1年目より入園2年目の方が「危機回

避」の得点が低く、「子どもによるリスク管理」の得点が高いことが示された。これは、大坪他⁵⁾の指摘する、リスクの効用に対する啓発が、保護者として幼稚園生活を行ううちに、何らかの形で行われたことを示す結果となった。

また、入園前は父親の方が母親より「子どもによるリスク管理」が高く「遊びの安全管理」が低い、つまり母親の方が管理する傾向が強かったものが入園によりその差異が見られなくなっている。これも大坪他⁵⁾の指摘する、リスクの効用に対する啓発が、保護者として幼稚園生活を行ううちに、何らかの形で行われたことを示すものであろう。父親においても子どもを意識する管理は入園により低下しているが、母親はそれ以上に意識の変容があり、子ども自身に管理させようとする傾向が強くなったことを示している。普段の生活の中で子どもを送迎したり、参観日等で子どもの実際の様子を見たり、担任と話をしたりするのは、ほとんどの場合は母親である。そのような幼稚園での多くの経験が、父親よりも母親により大きな変容をもたらせた可能性がある。

保護者のリスクに対する認識変容の要因

「子どもの遊びとスリルやリスクのことについて、あなた自身の考え方に影響を与えたもの」という質問に対して、半数が子どもの姿から影響を受けたと回答した。これは、実際に子どもがスリルに挑戦したりリスクを回避したりできるようになる姿に保護者が触れることが、保護者の認識を変容させるためにもっとも影響力をもつことを示唆したものであろう。その意味では、保護者に対してリスクの効用の啓発を行う最も有効な手段は、遠回りのようでも子ども自身がリスクに向かう遊びを保障し、リスクの経験を通して子ども自身が成長することだとも言えるであろう。また、子どもの実際の姿を保護者が見る参観日などの機会の有効性も示唆している。

回答において特徴的だったのが、「担任との話」や「FC作業や木いちご一役の森での労働」が、園だよりなどの文書による発信よりも割合が高いことであった。文書による発信は、その理念を理論的に説明することには適しているように思われるが、保護者に直接訴えかける力はさほど強くないのであろう。「担任との話」では、保護者は保育者に直接働きかけられ、双方向のコミュニケーションが可能である。また、自分の子どもの話であるために、より具体的に想像を巡らせることができる。さらに、子どものリスクとは直接関係ない「FC作業や木いちご一役の森での労働」が比較的高い割合を示したのは、自分の身体という「我

がこと」を通して考え方を変容させたということであろう。特にこの項目を回答したのは父親が多かったが、保護者が子どもが遊ぶフィールドに実際に出ることで、子どもが感じているリスクやワクワク感、ドキドキ感などを肌を通して感じ、また同時に自分の幼少時代の経験を追体験したことが想像される。幼児にとって直接体験が大切なと同様に、保護者にとっても保育者から直接語りかけられたり、自分が直接フィールドを体験するという自分のこととしての体験を行うことが、リスクの意味や効用を伝えることに有効である可能性が示唆された。

5. 総括と課題

本研究では、遊びのリスクに対する保護者の認識として「危険回避」「子どもによるリスク管理」「危険に対する不安」「遊びの安全管理」の4因子を見出した。このうち、「危険回避」「子どもによるリスク管理」「危険に対する不安」は、幼稚園入園後、保護者がリスクを許容し子ども自身に管理させる方向に変容しており、幼稚園入園後の何らかの要因により保護者の認識が変容していることが示された。その変容の要因としては、実際の子どもの姿を通して認識を変えたとする回答が最も多く、子どもが実際に遊ぶ姿を保護者が見ることの有用性が示唆された。また、その他の要因として、担任との話をすることや保護者自らが遊び場を体験することなどが、紙媒体の発信よりも多く回答され、保護者自身が直接体験することが有用である可能性が示唆された。

今後の課題として、今回の結果をふまえてリスクの意味や効用を啓発するための具体的な内容を検討し、その効果について検証することが求められる。そのた

めに、保護者のインタビューなどを通して変容の内容やその要因についてさらに検討したり、先進的な他園での実践例も参考にしながら、有効な啓発のための内容を検討する必要があるであろう。また、本研究では保護者のリスクに対する認識が入園後に変容していることは明らかになったが、その変容が子どもにどのような影響を与えているかについては検討されていない。また、子ども自身が実際の遊びの中でどのようなリスクのある遊びを行っているのか、リスクに対するマネジメントをどのように行っているのかについては検討されていない。今後は子どもに視点を当てた遊びのリスクに関する研究を行うことも必要であろう。

引用文献

- 1) 大坪龍太・仙田考(2005)「子どもの遊び場におけるリスクの効用に関する調査研究のための基礎的整理」『こども環境学研究』第1巻・第2号, pp.52-55.
- 2) 国土交通省(2002)『都市公園における遊具の安全確保に関する指針』
- 3) 港区児童遊園等のあり方検討委員会(2010)『子どものあそび場づくり20の提言』
- 4) 松田広則・田爪宏二・鈴木樹・伊東潔・高城義太郎(2009)「教育・保育現場におけるリスクマネジメントーリスクに対する認識を中心にー」『鎌倉女子大学学術研究所報』第9号, pp.27-37.
- 5) 大坪龍太・遠藤幹子・川上正倫・仙田考・中津秀之・丸山智正・八藤後猛・仙田満(2011)「子どもの遊び場におけるリスクの効用に関する調査研究」『こども環境学研究』第7巻・第1号, pp.86-91.